

「巻頭インタビュー」

「震災を忘れるな」。その思いを全国に

中村雅俊

interview with
MASATOSHI NAKAMURA

俳優・歌手として活躍する中村雅俊さんの故郷、宮城県女川町（おんながわまち）。豊かな自然と世話好きな人に囲まれ、高校卒業まで18年間を奔放に過ごした。そんな思い出の詰まった風景は、東日本大震災で一つ残らず消え去った。以来、義援金を募り、時間を見つけては現地を訪れ、歌を歌い、地元の人々の気持ちに、そっと寄り添ってきた。いま「震災を忘れるな」との思いを、全国に発信しながら、支援活動を続ける。

★以外の写真Ⅱ 野弘路 取材・文Ⅱ 茂木俊輔



なかむら まさとし

宮城県女川町生まれ。1974年4月 NTV「われら青春!」の先生役でデビュー、挿入歌「ふれあい」で歌手デビューも果たす。俳優としての主演作品は100本以上。歌手としてもコンスタントに曲を発表し、全国コンサートも1400回を超える。2014年は9月27日のかつしかシンフォニーヒルズを皮切りに、大宮ソニックシティ、仙台電力ホールなどで、デビュー40周年ツアー〜ワスレナイ〜を開催



2011年10月、女川第二小体育館で歌う中村さん

★
女川町で自由に育ったことが、自分の性格に大きな影響を与えたという中村さん。岩場の飛び込みで度胸試しをやったり、素潜りでアワビを採ったりと、元気いっぴいの少年期を過ごす。その故郷が大きな被害を受けた。

震災は人ごとではないことを全国の視聴者に訴えたい

——女川町の被災を知った時、どんなことを考えましたか？

中村 震源地が東北と聞いて、女川町の情報を必死に集めたのですが、これまで見たことのない光景に衝撃を受けました。

私も女川町でチリ地震の津波を経験しました。警報を聞いて裏山に逃げ、津波が来るのを待ったことを覚えています。市街地にあった実家は1階の天井まで水につかったのですが、今回はその時と比較にならない大きな被害です。15mくらいの高台にある病院の1階天井付近まで水が来たというじゃないですか。1階で働いていた親戚から「柱にしがみついたら難を逃れた」と聞いてぞっとしました。

——震災後、女川町を訪ねた時の印象は？

中村 4月14日に救援物資を車に積めるだけ積み、女川町に向かいました。時間はかかりましたが何とか到着し、まちの様子を見たんですが、正直言葉を失いましたね。

18年間住んでいたもので、どこに何があるかは分かっているつもりでした。この左に郵便局があつて、そこを右に曲がると、畳屋と薬局……と。その記憶が、思い出ともにかき消されてしまった。戦争は経験していませんが、空襲を受けたような印象でした。

甚大な被害を目にして、「復興の道のりは長い、これからもずっと支援が必要だ」と覚悟を決めました。地元ですからね、やっぱりそこは、人と違った気持ちになります。被災者一人一人が心に負った傷を、地元の間人であるオレらが癒やさないと。歌を歌ったり東北弁で話を聞いたりすることができるところから。



★
名譽館長を務める観光物産センター「マリンプラザ」も大きな被害を受けた。そこに「女川の町は俺たちが守る!!」の垂れ幕を掲げた

——具体的にはどんな支援活動に取り組んでいるのですか？

中村 一つは義援金を募ることで。皆さんからいただいた義援金で、映画を見たり、本を読んだりできるトレーラーハウスを寄贈しました。さらに、できる限り足を運んで、被災者の方々と接して、話を聞いたり、歌を歌ったりしてきました。

今はBS朝日「いま日本は」という報道番組で、女川町も含めて多くの被災地を訪ねる機会をいただいています。

番組ではたびたび仮設住宅にもお邪魔しています。一口に仮設住宅といっても、住み心地が大きく違うんですね。交通の便が悪かったり、壁が薄くて隣の音が響いたりする仮設住宅では、とにかく早



★
2011年10月には女川町にトレーラーハウスを寄贈し、贈呈式を行った

く出たいという話を聞きました。こうした被災者の声を通して全国の視聴者にお伝えしたいのは、「3・11」の出来事を忘れてはいけない」ということです。

震災は、決して人ごとではありません。首都直下や南海トラフの巨大地震が想定される中、誰もが遭遇するかもしれないという意識を持つべきです。そのためにも、東日本大震災を風化させてはいけません。

悲劇を持っている被災者、素直に思いを吐き出してもいい

——被災者の方々は、3年が経過

したいま、どんな思いをお持ちだとお考えですか？

中村 いままで共存してきたので、「海は恨んでいない。終わったことはしょうがない」と、割り切り、少なくとも普段は前向きに暮らしています。ただ、皆さん悲劇をお持ちです。思い切り泣きたい時もあるでしょう。それを素直に吐き出していいと思います。

先日、岩手県大槌町で「風の電話」をリポートしました。個人の方が自宅の庭に電話ボックスを置いているんです。その中の電話には電話線はつながっていません。震災で肉親を亡くした方が訪れて、その電話で天国と通話する。そうすると普段は気丈にしているも、本当の心情を吐き出し、泣き出すこともあるというのです。

私の歌を聞いた時も、涙を流す方が多いんです。頑張っていた気持ち、歌を聞いてふと緩むんですね。その姿を目にすると、その方にとってはそれでいいのかなと、こちらも心安らぎます。

これからは、こうした心のケアが大切になっていくと思います。

歌を聞くと、頑張っていた気持ちが 緩んで涙を流す人がある。 今後は心のケアこそが大切だ

interview with
MASATOSHI NAKAMURA

そして、私も少しでもそのお手伝いができればと、考えています。

——今後の復興についてどのように見ていますか？

中村 まだ問題が山積みで、一つ問題が片付いても、新しい次の問題が出てくる状況です。防潮堤の高さの問題に代表されるように、人によって意見が違って、まとめ

るのが大変なことも事実です。しかし、震災から3年たつて、確実に被災者の意識は変わってきたと思います。いい意味で行政に頼らない、自分たちで行動を起こさないと、と覚悟を固めた人が結構見られます。

そうした動きが、復興を少しでも早めることを切に願い、少しでも応援できたらと考えています。

